

土 淨

1985-6

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和二十四年四月二十八日 遷移 (集郵部登録) 第一五五号
昭和六十年五月二十五日印刷 昭和六十年六月一日發行
第五十一卷 六月号



小林





六月の秀句

六月や峯に雲置く嵐山

紫陽花の花に日を経る湯治かな

青蛙おのれもペンキぬりたてか

松尾 芭蕉

高浜 虚子

芥川 竜之介

六月号



彼の仏の円光は百億三千大千世界の如し、円光の中に於て百万億那由他恒河沙の化仏あり。

——『観無量寿経』真身観文

目次

法話

＝いのちをはぐくむ I＝

仏の眼で見る……………小西祐謙……(2)

心のはなし(下)

心への取りくみ……………金子寛哉……(9)

み仏とともに = 3 =

——樽風呂でお説教——……………安居香山……(19)

《世相のスケッチ》

闇鍋……………藤原円忠……(16)

＜読者のページ＞

古経典は教える……………上野浩……(24)

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(三)……………木下隆一……(28)

◇◇長篇連載小説◇◇

立ち止まるな善導 第12回

枯れ葉がまねく

……………寺内大吉……(35)

挿絵 松濤 達文

表紙 小林治郎 画

カット 大正大学美術部

(法)

(話)

いのちをはぐくむ I

仏の眼で見る



小西祐謙

(上宮高等学校副校長)

○入学式の桜

今年は雨が多かったせいか、四月に入って晴天の日の桜の花は一入明るく鮮やかに映った。

四月の初め、私の学校の中学、高校の入学式で新入生にお祝いと激励の言葉を述べたが、両日とも校門の桜が余りに美しく爽やかであったので、予定を変えて桜の花の話をした。



世界に人は多いが「自分」はただ一人で、その一人ひとりが他の人にはない持ち味をもっている。勿論欠点もあるが独特の良い素質を持っている。それを伸ばし育ててゆくのが教育であるが、ただ自分の素質は自分でも気付きにくい。何かしごとをしてみて案外に才能のあることを発見し自分でも驚くことがある。積極的にやってみるこそが大切だが、あの美しく咲いている桜も、つぼみの時にはそれを割ってみてもあの美しい色も形も見当らない。赤や黄の草花もその種や球根にあの美しさを見出すことはできない。しかし、そこに将来美しい花となる素質を内包していることは間違いない。

それが、天地自然の恵みによって育ってゆく。恵みの力を忘れてはならないと同時に、その草や木の成長しようとする努力をも忘れることはできない。水の乏しい炎夏の夏や凍りつく冬の寒さにも耐えぬいて迎えた春に違いない。今日の桜を見て「きれいだなア」と思うと同時に「よく頑張つたなア」と思わずにはいられない。

草も木も生きている。育っている。人と同じように、諸君も、両親や今日まで育てていただいた多くの人々、自然の恵みがなければ今日の自分はないし、入学の喜びも

ない。感謝の心を忘れてはならないし、そういう自分を誰よりも自分自身が大事にして頑張つてほしい、と。

◇

◇

こんな話になったのだが、果して生徒たちはどう受けとってくれただろうか。春は生命の躍動を最も感じ易い季節。私は、桜の花を見ているうちに、育つこと、育てること、育てられることを話したくなったのである。

○大いなる記録

昨年の四月のことである。非常に興味深いテレビの番組であった。

神奈川県藤沢市に住む五十八歳の公務員、富岡好市さんが二十八年間に亘って自分の娘さんの成長を刻明に写真に撮り続け、その数は実に十万枚にのぼった。好市さんが娘の写真を撮り始めたのは長女が生まれた時からで、当時未熟児であったため「今日が見おさめになるかも知れない」と思って毎日勤めから帰るとすぐ写真を撮り、次女が生まれてからは姉妹の二人を撮り続けた。幸い長女も順調に育ち今では二十八歳に成長した。この二十八年間の記録が放映されたのである。題して「ドキュメント人間列島——家族・大いなる記録・富岡家一〇万枚の肖像」(NHK・昭和59年4月4日放映)という。

富岡さんの根気強さもさることながら、その写真の一枚一枚にそれぞれの想い出があり、その集大成は富岡家の姉妹や家族の生活、それをとりまくその時代の社会の歴史を物語っている。偉大な愛の記録であり、娘さんにとってはかけがえのない人生の貴重な記録でもある。

○自分の顔

この放映の中で特に面白いものがあった。それは、その娘さんの顔の写真が連続して映されたことである。幼いかわいい顔が見るうちにすっかりした少女となり、美しい娘の顔に変わってゆく。カメラと顔の位置を予め定めておいて一定期間をおいて撮っていった写真である。花の開いてゆく様子や茸の成長、地形の変化など長時間に僅かずつ変化するものの動きをわかり易く短時間に短縮して見せるいわゆる微速度撮影の手法である。成長の過程が一目瞭然で、人は成長してゆくものであり、顔も成長している。これからも成長し変ってゆくであろうということを実感させる。人の顔の一生も、この調子でやれば数分間の映画でその動きを見ることが出来るであろう。珍しい映像である。

◇

◇

私がこのテレビに非常な関心を持ったのは、実は、同じような事を私も考えたことがあ

ったからである。三十年も前のことになるが、当時私の学校には「宗教の時間」があつて週に一時間仏教や宗教に関する話をしていた。若い人は生理的にか社会的にかわからないが、総じて宗教については無関心か、あるいは拒否反応のいずれかの態度を示す者が多い。そこでこの宗教の時間、四十五分の間に何を話そうか、どう話を進めていこうかと随分苦勞したものである。顔の微速度撮影の話はその時に用いた材料の一つであつた。

この話をした時、生徒はその内容が平素考えもしないことであり、映画に関係のこともあつたからか非常な興味を示し、中には自分も一度やってみようかという生徒まで現れた程であつた。

映画の話からいよいよ本論に入る。

「君は自分の顔を知っているか」と質問する。生徒は当然げんな顔をする。「僕はこんな顔です」「君は生まれた時からそんな顔をしてるのか？ ひげなど生やして」——笑い声がおこつてお互いに話し合っているうちに「自分の顔」というものについてだんだんと考えてゆく。

私の写真は、いつのどの写真でも確かに「私の顔」であり、他人のものではない。しかし、それをもって私の顔のすべてというわけにはいかない。少しずつ違ふどの顔もどの表情もみな「私の顔」でありながら「これが私の顔だ」と言い切れるものはない。

「私」というものがそういうものだ。そのこともこれらの多くの写真は示してくれている。私は確かに存在しているし、私の顔も確かにここにある。しかし、固定した「私」なり「私の顔」は存在しない。変化しつづつ連続しているのが私の実体なのである。私たちが経験しているものは、難しく言えばこの連続と統一の上に認識されているといつてよいであらう。



成長するにつれて私たちも変つてゆく。顔形だけでなく考え方も。そういうことは百も承知していることだけれども、そのように動き、流れているのが実は「私」という存在なのだということは案外忘れている。本当に忘れているのである。

古い一枚の写真は、かつての自分であることはわかっていても、それと今の自分とが連続していて、その連続しているものが自分なのだという実感も味わうことは少い。

今日も、ある法事の席で古い数枚の写真が持ち出され、それを見ながら親戚の人たちがなつかしそうに歓談している場面に出会った。写真というものは、本当にいろいろなことを私たちに教えてくれるものである。

○いのちは生きている

宗教は、気づかぬことに気付かせて頂く導きであり、宗教はまた発見であるといつてよい。

私たちには、知っているはずのことで気付いていないことが沢山ある。そのことのために私たちは思い煩い、苦しみ、いたずらに日を送る。

私たちにとって最も大切なことは、私たちがいま生きているということである。生きているからこそ思い煩い、苦悩するのであるが、楽しいこともうれしいこともまた生きていればこそである。

「いのち」というものをもっと真剣に考えなければならぬし、いのちは生きていることに気付くべきであろう。「生きたいのち」とは何か。私たちの存在の根源の問題であるだけに、一度ゆっくりと考えてみることは意義のあることであるし、その問題を日常生活の次元とは違った宗教という別の角度から考えてみると、そこから新しい見方、考え方が開けてくるにちがいない。「宗教の眼」で見るのである。

いのちに関しては、仏教ほど明確な解答を与えてくれるものはないから、是非とも耳を傾け探求したいものである。道を求める心（道心、菩提心）は必ず私たちの心の支えとなって育ち、成長してゆくに違いない。

心のはなし(下)

|| 心への取りくみ ||



誰が詠んだのか解らないと言われているが、言
い古された古歌に、

心こそ鏡にうつるものならば
さぞや姿のみにくかるらん

金^{かね}子^こ寛^{かん}哉^{さい}

(大正大学講師)

と言う歌がある。この歌の最初の句の「心こそ」と言うのを「我が心」とするものもある。「心こそ」と言う方は、広く人間の心一般を意味するものであって、誰にでも共通する心を指しており、「我が心」とする方は、特定の個人の自己反省の意味を込めて詠われたものと思われる。

それはとも角、この歌の意味する所は、今更言うまでもないが、前者の方は「外面如菩薩、内面如夜叉」と言われるような、多くの人々の心の姿を少し皮肉をまじえて詠んだものとも受けとれるし、後者の方は自らの心を向上させて行こうと言う、宗教的な強い自己反省を伴った意味を込めて歌われたものであると言うことが出来る。

いずれにしても、このような歌が示すように、宗教的な立場からの「人間の心」への取りくみが、一般の人々にまで解るような形で早くから行なわれていたのだと言うことだけは確かなようである。

インドに釈尊が出世して教えを説いて以来、その教えの多くの部分が「心」の問題を中心に展開し、それがやがて「心のしくみ」の解明よりは、「本来の心」そのものを如何に体得すべきかと言う方向に展開されて行ったのではないかと言うことも前回既に述べた通りである。そのような中にあって、「仏心」に通ずる向上的な面よりも、その「仏心」に通ずる要素（仏性）を持っている人間

の心の「現実の姿」をひたすらに眺めて、より深く、より厳しく反省して来たのが浄土の教えに通ずる「心」への見方だったのではないかと思われる。

人間の心の「現実の姿」を深く見つめれば見つめる程に、その心がどうしようもない、ぬぐい切れない迷いに包まれているのだと言うことを実感せざるを得なかったのが浄土の祖師達だったのではなからうか。浄土へ往生を願い、阿弥陀仏の悲心（仏心）にすがるとも、皆人間の心の「現実の姿」への深い省察に基づくものである。

尤も、この「仏心」と「衆生心」の関わり方について、浄土教以外の教えでは、人々の心の中に「菩提心」を発することを勧め、それを育てて行つてやがては仏心にまで成長させるのだと言う考え方もある。これは本当にすばらしいことだと思う。そのように出来る人がいるならば、ぜひそうすべきだと思ひ、本来「心」にはそのような特性（仏性）がそなわっているのである。

しかし、浄土の教えの中で考える人間の「心」

の理解はそのような方向には向かわなかった。そのような向上的な「心」の見方には見切りをつけて、その見切りをつけた所から、それではその心をどうすれば良いのかと言う方へ再度展開させて行つたように思われる。そのことは、同じ「菩提心」と言う言葉を用いながら中国浄土教祖師の一人である曇鸞大師は、ただ単に衆生自らの向上心とはとらずに「往生を願う心」であると理解されていることから推察できる。

このような浄土教的「心」の理解や受け取り方の展開は、ただ単に「心」を個人の問題として考え、それを浄化して行こうと言うのではなく、生きとし生ける全ての人々が、共にその「心」を一人残らず本来あるべき姿にもどす為にはどうすべきか、と言う所から出発しているように思われる。それは又ただ単に人間の側からの願いだけではなく、仏の御心、即ち釈尊が教えを説かれた御心も、その本来の目的はそのことにあったのだと理解されているのである。浄土所依の經典である『観無量寿経』に「仏心とは大悲悲是れなり」と

説くのは端的にこの事を示しているのである。

以上浄土教思想の流れの中で取りくまれて来た「心」について考えて見たのであるが、このような流れを日本の浄土の祖師達はどのように受けとり、又理解されたのであろうか。次に、浄土宗祖法然上人の場合を中心に少し考えて見たいと思う。

法然上人の歌に次のような歌がある。

池の水人のところに似たりけり

にぎりすむことさだめなければ

と言うのである。この歌は別の本によると、

我がこころ池水にこそにたりけれ

にぎりすむことさだめなくして

と記されている。歌の意味は私が今ここでわざわざ下手な解説を試みる必要もない程、そのまま素直に理解できるのではないかと思う。今この二つ

の歌を示したのは、法然上人が人間の心の姿をいかに把握し、そして自らの心の有様をいかにするどく、しかも深く反省されているのかを紹介する為だけではない。

私が言いたいのは、それよりもむしろ、法然上人の歌っている「人間の心」、或は上人自身の考えている「心そのもの」とは一体どのような意味での「心」だったのだろうかと言うことである。

上人が十五歳で比叡山に登り、四十三歳でお念仏の教えに帰依するまでの求道と修学の過程から考えて、今の「心」の理解には必らずや前回述べたような「心のしくみ」と心そのものは本来「無垢清浄」なものであるべきだと言う考え方があったものと思われる。

そのような観点から法然上人の歌を今一度味わって見ると、自ずとそれが感じとれるように思う。上人が自分自身の境涯を反省された歌とすれば後者の方が素直であるし、又上人が浄土の教えに帰依し、自らの心の安住を得て後に信者達に對して人間一般の心の有様を教訓的に説かれたも

のとすれば前者の歌も首肯されよう。しかし、両者に共通しているのは、心の本体そのものは「無垢清浄」であるべきだと言う基本的な考え方である。それは今の歌で言えば、濁りのない澄んだ池の水に相当するのである。本来「心」とはそのようであるべきなのに現実にはなかなかそうなり得ないのが人間一般の心だと言うことである。

従つてこの歌は、ただ単に人間の心の有様を客観的に第三者の立場から眺めたものではなく、本来あるべき姿になり得ない人間の心の姿そのものへの取りくみを示しているとも言える。

このような法然上人の求道と「心への取りくみ」を、浄土宗の第二祖聖光上人が聞き伝えた言葉に次のようなものがある。

凡夫の心は物に随つて移り易きこと譬へば猿猴の如し。実以つて散乱動じ易く一心静まり難し。無漏の正智何に因りてか発ずことを得ん。若し夫れ無漏之智剣無くんば如何んが方に惡業煩惱の繩を断ぜんや。惡業煩惱の繩を断ぜざれ

ば何ぞ生死繫縛の身を解脱することを得んや。
悲しい哉悲しい哉何が為ん何が為ん。
爰に予が如き者已に戒・定・慧の三学の器に非ず。此の三学の外に我が心に相應する法門ありや。此の身に堪能なる修行ありやと、萬人の智者に求め、一切の学者を訪へども、之を教ゆる人も無く、之を示す倫がらも無し。然る間敷き飲きて経蔵に入り、悲しみ悲しみて聖教に向い、手目から之を披いて之を見るに、善導和尚の観經の疏に、「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行、住、坐、臥、時節の久近を問わず、念々に捨てざる者は正定の業と名づく、彼の仏の願に順ずるが故に」と云へる文を見得ての後、我等が如き無智の身は、倫へに此の文を仰ぎ専ら此の理を憑み、念々捨の称名を修して決定往生の業因に備ふれば、密だ善導の遺教を信ずるのみに非ず。亦厚く弥陀の弘願に順ず。願彼仏願故の文神に染み心に留るのみ。

とのべているのである。言葉は少々難解である

が、その意味する所はほぼ理解できるのではないかと思う。今要点のみを少し解説して見よう。
要するにこの文は、法然上人が自らの心の省察と求道の過程を顧みて述懐された言葉であって、その「自己の心」の深い省察の結果見窮められた「物に随って移りゆく猿猴」の如き心を以てしては仏道修行によって仏心に近づくことはとても望み得ないとしているのである。又仏教の学問を戒学・定学・慧学の三つの分野に大別した場合、自分自身はその中のどれ一つをとって見ても実践できそうもないといわれる。

今この中の戒学というのは、身体と言葉で行なう非を防ぎ止めて良いことを行なうて行こうとすることであり、定学というのは、心を一つの対象に専注して散乱させないようにする精神作用とその状態を言うのであって、もとは梵語サマーディの訳語である。前回述べた中の「俱舍宗」では大地法の中の一つに数え、「唯識宗」では五別境の一つに数えている。最後の慧学の「慧」と言うのは梵語ブラジュニャーの訳で、心所（心のは

たらしき)の名前である。事物や道理を識知し、推理し、判断する精神作用である。これを「俱舍宗」ではいかなる心にも必ずずついて起る作用であるとして大地法の一つに数え、「唯識宗」では全ての時全ての対象(境)に対して起る訳ではないとして別境の一つに数えている。

それはとも角、以上見たように三学の中の戒学は身体的な行動を言い、定学・慧学は「心」の問題に取りくむ学問である。法然上人はこの三学は何れも自分の「心」をもってしては実践し得ないのだと深く反省されているのである。

それでは自分と同じような心を持った多くの人々はどうすれば良いのかとさがしもとめた結果、善導大師の記した「一心専念」の文に出逢い、本願念仏を称えて阿弥陀仏の浄土へ往生することにより自らの心を「安住」させたのである。

以上がこの文の大意であるが、この文には法然上人が仏門に入られてのち、浄土の教えに帰一されるまでの、自分自身への「心への取りくみ」が如実に示されているのである。

法然上人自身は、この後恐らく阿弥陀仏の御心(本願)を味得され、念仏するその中に阿弥陀仏の御心と一つになった「仏心一如」の境涯の中に生涯を過ごされたものと想われる。そのような境涯を詠われたのが現在浄土宗の宗歌となっている。

月かげのいたらぬ里はなけれども

ながむる人の心にぞすむ

と言う歌である。

ただここで一つだけ申しそえたいのは、法然上人御自身はそれで良かったのであるが、その後念仏の教えに帰依しに念仏を称えて往生を願う者の心構えとして、三つの心(三心)を具えることが必要であるとしていることである。それは至誠心・深心・廻向発願心の三つである。従って、念仏往生を願うものはこの、三心をいかにして具えて行くべきかということへの真剣な取りくみが必要である。

◇◇竹中信常博士頌寿記念論文集◇◇

宗教文化の諸相

「編集・発行」 竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

「体裁」 B5判変型一四〇〇頁 定価三五〇〇円

○すいせんのことば

浄土門主・知恩院門跡 藤井実 庇

〔宗教人必読の書〕——竹中博士の頌寿と大正大学ご退任を記念して刊行された『宗教文化の諸相』を拝見させて頂きますと、今日の学界を代表される内外の学者が寄稿され、しかも内容は多岐にわたる専門分野がカバーされています。博士の人となり、学問の広さを如実に示しているといってもよいでしょう。今日、仏教界をとりまく現状はきびしいものがあります。幅広い知識と絶えざる研鑽が宗門人に要請されています。本書はまさに時機を得た恰好の書といつてよいでしょう。広く江湖に推せんしたいと思います。

●発行●

〒170 東京都豊島区西巣鴨三丁目二〇番一号

大正大学宗教学研究室内

竹中信常博士頌寿記念論文集刊行会

電話〇三（九一八）七三二一番

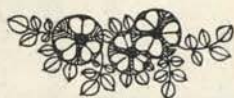
●申込方法●

書店に御申込の場合は定価三五、〇〇〇円。

△発売元 山喜房仏書林△

△世相のスケッチ△

闇鍋



藤^{ふじ}原^{わら}円^{えん}忠^{ちゅう}

(市原市無量寺住職)

極く親しい友人達が集まってする会食の一つに闇鍋というのがある。

会員がそれぞれ何か鍋料理の材料を持ち寄って、その材料で鍋料理を作るのだが、何を持って来たのかはお互いに秘密にしておいて、世話係が各人持参の材料を大鍋に入れて味付けをする。

適当に煮上がったところで、酒などを飲みながらみんなで鍋の中の煮物を食べるという趣向だが、始めから部屋の中を薄暗くしておくから、鍋の中に何が入っているのか見当が付かない。誰が一番先

に箸をつけるかにも興味が湧く。

現在では鍋をあたためる熱源がほとんど電気とかガスだが、以前は炭や時には薪を使った。薄暗い部屋の中で鍋の下に炎がチラチラと周囲を照らして、集まった人の顔や調度品に深い陰影を刻み異様な雰囲気を出す。

こんな独特の空気の中で「これはおいしい」とか、「なんだか不味いな」とか、「ふわふわしている」とか、「ずいぶん固いぞ」とか、「何だタクワンが入っているぞ」とか大騒ぎしながら一つの鍋の中をみんなでつづくのだが、時には不安になったりしながら結構楽しい会食というか宴会が出来る。

しかし、全員が食べ良さそうなものを鍋に入れば良いが、一人でも変てこなものを入れれば、誰かがその被害に会うことになる。

私達の生活する人間社会もどこかの闇鍋の会食に似ているように思えてならない、オギアーと生まれた赤ん坊から老人迄、健康な人も病いに伏す人も、すべての人が社会へ何がしかの影響を与えていて、その影響を誰かが受けて喜んだり怒ったりする。その在り方は正にこの暗鍋の賑わいを連想させる。

勿論闇鍋は言ってみればほんの一場の歓談に過ぎないし、人生は広大で限らないドラマだから規模から言ってもその比ではないだろう。更に闇鍋は会食の途中から灯りを点けて、鍋の中をお互いに確かめ合ってそこで又ひと騒ぎし、結局は誰が何を鍋に入れたのか白状させられて改めて談笑が盛り上がるのだが、人生では誰が誰にどのような影響をもたらしたのかが明かされないところがある。又お互いに影響を与え合うといっても、どこが始まりでどこが終わりかも判らないという完結性のない不可解さがある。

終りが判らないどころか、人生には生まれる前からお互いに影響を与えたり与えられたりして来た

“生有”という時代があるという。逆に死んだ後には“死有”という時代が続くのだという。大変に永い永い時間の流れの中で、自分という一人の人間が多くの人と影響を与えたり与えられたりしながら流れ流されて行くのだという。

そういう不可解な人生を、一場の闇鍋の会食に比べる事は無理かも知れぬ。がしかし、それでも過ぎ去った過去をふり返れば、多くの人が持ち寄ったものに依って一人の人に喜びや怒りを起こさせ、一人の人が持ち来たったものによって多くの人に喜びや怒りを感じさせるという在り方は、やはり闇鍋は人生に似ている、と思えてならない。

私は、自分が今生きている“本有”というこの時代の中で、周囲の人や社会にどんな影響を与えているのか、本当のところが知りたいと思う時があるが、それはかなわぬことらしい。せいぜい人生という闇鍋の会員にあまり迷惑を掛けない程度の生き方をしたいと思うだけだ。

今の自分の在り方というものが、本当のところはどうなのか、という事すら判らない自分ではあるが、過ちの少なからん事を願い、「仏法の大海は信をもって能入となす」という教えもあるから、毎日の生活の中では、仏様をお願いをし、仏様に懺悔をして、心が仏様から離れないところで生きて行きたいと思う。

又「世にもろもろの生き方はあれど、それらは放逸ならざるをもって基本とす」と言う教えも時折りは思い出しながら、自分の仕事に真面目に生きて行きたいと思う。

そうすれば“生有”、“本有”、“死有”の永い流れの中でも大きな間違いのない流れ方が出来るだろう。人生という闇鍋の会の一会員としても、まずは不適格などという烙印を押されることもないだろう。

そんな人生を送りたい。

み仏とともに

=3=

—樽風呂でお説教—



やす い こう さん
安 居 香 山

(大正大学教授・文博)

仏教の教えの中に、一族の中の誰かが出家すると、九族が極楽に生れるというのがある。九族とは、父母、祖父、曾祖父、高祖父から、下は子、孫、曾孫、玄孫に至るまでである。それが、えがたい因縁であるからである。

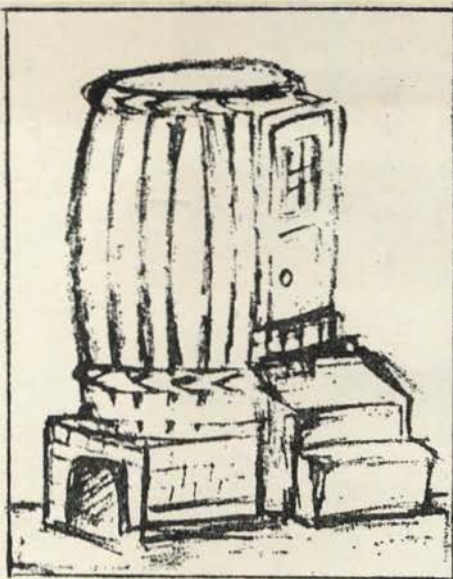
父母は、こうした話を、いつか説教師に聞いたに違いない。後年、しばしば父の口から、こうした話を聞かされた。そして、父母達は、この希望を私に托したわけである。

しかし、いたけない小学校に入っただばかりの私に、この話が簡単に通ずるわけがない。あの手この手の説得工作が、私に向けられた。もう昔のことで、どんな話の筋で、その工作が行われたか、私はさだかには覚えていない。ただ、風呂の中で、そんな話を随分聞いたように覚えていいる。

風呂と言っても、その当時の近江の風呂は、まさに風呂桶といわれるにふさわしい、一種独特のものであった。桶というよりは樽と言った方がよい。そのスケッチは、別掲のようである。今では、もう何処にもなく、郷土博物館に保存されている程度であるが、昔は、どの家

の土間にも、この樽風呂があった。

樽風呂は、丁度、セメン樽を立てたようなもので、入り口は、茶室のにじり口よりも小さく、やっと頭から入れる程度で、樽の直径は一メートルもあるであろうか。中は五右衛門風呂形式で、湯ぶね板が浮かしてあり、それを沈めて立って、大人では頭がつかえる程の低さであった。



樽風呂

中に入ると男の人ならばあぐらをかくのであるが、別に小さな子供なら一人や二人はゆっくり入れる広さはあった。ただこの中の湯は、入り口の窓のかげんで、深さはわずかに二〇センチ程で、あぐらをかくと膝がやっと湯につかる程度で、村の人は「玉うかし」と言って笑っていた。

中に入ったら入り口のドアを閉めるわけであるが、冬でも決して寒くなかった。今日的に言えば、一種のサウナ風呂で、湯気で樽の中が一杯となり、ジャブジャブと湯をかけている中に、身体が温まった。農家では、石鹼など殆んど使わず、汗をながすのがせいぜいであった。夕方遅く農作業を終り、バケツに四、五杯も水を入れ、薬をひとつくべすれば、風呂は沸くという、まことに合理的な風呂である。

よく私はこの風呂に、父と一緒にいった。そこで、いよいよ父の説教が始まるのであった。

「伊三^{いさ}あ、おまえも、京都に行かないか。京都はよいところだぞ」



—稲枝駅—

こんなところから話は始まった。「伊三^{いさ}あ」というのは子供のころの私の呼び名で、伊三郎というのを略して、村ではこのように呼ばれていた。

「なにしにゆくのか」

「寺に入って坊さんになるんや」

「坊さんに、いやや。わしは、でっちになる」

多分こんな会話が交わされたことであろう。私の先輩の殆んどが、町の丁稚になり、正月や盆には、着物に兵児帯をしめ、鳥打ち帽子をかぶって帰ってくるのが、めずらしく、又あこがれでもあった。次男坊である私も、いつかは丁稚になって、あのような服装で、村に帰ってくるのを夢見ていた。

村の寺にも、子供がいたが、村の子供達とは、別扱いであった。第一、村の鎮守の祭には、寺の子供であるが故に、でられなかった。それでいつも、淋しそうな顔をして、村の祭りの行列を見たりしていたのである。神社の行事には、寺の者は関係することが、できなかったのである。

私が、どんなにくつをつけて、親の話を拒否していたか覚えてはいないが、坊さんになることについては、頑強に抵抗していたことは、後年父母からよく聞かされた。母はそんな時、風呂の外で薬をくべて、湯を沸していたのであるが、父の私に対する説教に対して、何くれとなく助言をしていた。そして、父と同様に、

「京都はよいところだぞ」

と、京都に上ることを、この上ない楽しいことと、説きすすめていた。

確かにその頃は、京都に行くことは、大変なことであった。東海道線で、彦根から二つ目の駅である稲枝が、私の村人の降りる駅で、歩いては一時間は充分にかかる所にあった。今では、三ツ谷村から京都に通勤する人もいる程であるが、当時としては、京都はまことに遠い都であった。

唯一の交通機関は自転車で、後年、私が田舎に帰る時などは、稲枝駅まで父が自転車で迎えに来てくれた。荷台に乗せるのも大変なので、一台余分に持ってきて、帰

りは父と車をならべて、わが家に帰ることもしばしばであった。比良おろしの吹く冬の夜など、向い風で難儀したことも、遠い昔の思い出である。

そんなわけで、京都に行けるということは、確かに子供心を動かすには充分であった。しかし、坊さんになることは望ましいことではなかった。そして、父母の説得は、どの位か、辛棒強く続けられた。最後に根まけたのか、京都行きという餌につられたのか、とうとう私は陥落したようである。それは、私が十歳の時、小学校三年になった時であった。

後に聞いたことであるが、常光寺に説教に來られた安田某という上人の手引きで、京都の寺町今出川を上ったところにある阿弥陀寺という寺に小僧に入ることが、約束されたようである。その時の父母の喜びはどのようであったであろうか。しかし、当の私の記憶には、その時の感激は、一向に残っていない。今にして思うと、淡い希望だけで、不承不承、京都行きを承知したに違いない。そして、それ故に、父母に血をはくような苦しみを与える結果となってくるのであった。

人間の運命などというものは、何処でどうなるもの

か、分らぬのであるが、私が受け難い人身をうけて、あり難き本願にあう縁は、こうした父母の血のにじむような努力の結果、でてきたのであった。そして私が、今日、法然門徒の一人として、こうして生き続けさせて頂いているのも、父母の信仰生活の余滴として、でてきたものであった。

父母の念仏生活は、まさに生活と一枚になっていた念仏生活であった。父は行住坐臥に、

「なむあみだぶつ」

を口にしていた。寝る時なども、布団の上に正座し、仏壇の方を向いて合掌し、「なむあみだぶつ」を二、三遍唱えてから横になった。母も又、同様であった。子供たちまでに強制はしなかったが、見様まねで、私などもやっていたように覚えている。

その頃、田舎では、麦めしであった。しかし母は、お釜の中心部分だけは、白米を入れるようにしていた。いた。したがって、できあがったお釜のご飯の中心部分だけは、白いご飯で、この部分は、み仏に供える分であっ

た。そして末っ子の私には、特にその白いご飯ののこりを、茶碗に入れてくれた。末っ子の私には、特別の愛情がそそがれていたのであらう。

そんなに可愛がってもらっていた私を、京都の旅に出そうというのであるから、両親の決意も相当なものであったに違いない。これもすべて、深い念仏信仰のなせるわざであったという外ない。そして、樽風呂でのお説教は効を奏し、いよいよ京都に行くことが決定した。

しかし、こうしてきまった京都市行きも、決して順調には運ばなかった。私の身に大きな事件がふりかかってきたからである。

或る日私に、下校の途中、馬車車の下敷になり、大怪俄をするというアクシデントが、降ってわいた。切角きまった京都市行きを間近に控えて、父母の驚きはさぞかしであったであろうと思っている。そして、すでに村中にも私の京都市行きは知れ渡っていたので、村中大騒ぎとな

(つづく)

古經典は教える

仏教の經典として最も古く、釈尊の言葉に比較的近いといわれる阿含部の經典、その中に含まれる二、三の經典から、私の好きな詩句を少し引用してみようと思う。その中には、現代の人々にとっても極めて教訓的なものが多くあることを知るからである。引用經典は、『ダンマパダ』（法句經）、『スッタニパータ』（經集）、『テラガータ』（長老偈經）、『テリーガータ』（長老尼偈經）からとした。

上野の

浩



○寝ねざる人には夜長く、疲れたる人には路長く、正法を知らざる凡愚には生死長し。（法六〇）

注 般若の智慧をみがき、彼岸にわたり、悟りをひらいて輪廻をのがれよ。

○「わが子なり、我が財なり」と思惟して凡愚は苦しみ悩む。我の我已にあることなし。誰の子ぞ誰の財ぞ。

（法六二）

注 不動の自己すでになく、あらゆるもの無常であるのに何

故なやむ。

○人若し先に悪業を作るも(後に)善をもって此を滅せば能く此の世間を照らす。雲を出でたる月の如く。(法一七三)

注 悪をなすも前非を悔い、善業をつめば、過去の罪は消えて、明るい幸せが来る。

○諸の悪を作さず、善を奉行し、自心を淨む、是れ諸仏の教えなり。(法一八三)

注 人は善業を積み、悪を行なわなければ善果がある。これがもろもろの仏(事實は過去七仏を指す)の教えである。

○天金錢を雨すも欲は尚ほ飽くことなし、欲は味少なく苦なりと識る人は賢なり。(法一八六)

注 人の欲望は無限である。賢者は無欲である。

○頭髮白ければとて長老ならず。彼の齡空しく老いたりと謂うべきのみ。(法二六〇)

注 人生社会は徒食せず、努力して過ごせ。

○糞掃衣を被、羸瘦し、筋脈露頭し、独り林中に処して静慮する人を我は婆羅門と謂う。(法三九五)

注 弊衣粗食に甘んじ、修業を怠らない人を貴い聖者としてあがめる。

○みずからは豊かに暮しているのに、年老いて衰えた母や父を養わない人がある——これは破滅への門である。(經九八)

注 老父母を省りみない人は破滅する。

○生れによって賤しい人となるのではない。生れによってバラモンとなるのではない。行為によって賤しい人ともなり、行為によってバラモンともなる。(經一三六)

注 人は人生社会における行為(業)が大切である。

○父母につかえること、妻子を愛し護ること、仕事に秩序あり混乱せぬこと——これがこよなき幸せである。(經二六二)

注 人間のほんとうの幸せとは。

○嘘をいう人は地獄に墮ちる。また實際にしておきながら「わたしはしませんでした」と言う人もまた同じ。兩者ともに行為の卑劣な人々であり、死後には同じような来世をたどる(地獄に墮ちる)。(經六六一)

注 この世にこのような人の何と多いことよ。

○そのことを深い沼と浅い溝とにおける水について知れ、河底の浅い小川の水は、音を立てて流れるが、大河の水は音をたてないで流れる。(經七二〇)

注 奥義を極めた人、悟りをひらいた人は些細なことに動じない。

○人が「これはわがものである」と考える物——それは（その人の）死によって失なわれる。われに従う人は賢明にこの理を知って、わがものという觀念に向かつてはならない。（経八〇六）

注 何時までもこれはわがものであるというものはない。古詩に、「たとえ百万長者でも、死んで身につくものはない、命はもろきものなれば、露の命となつてたり」。

○もろもろの欲望は苦しみである。エーラカよ、もろもろの欲望は安楽ではない。エーラカよ、もろもろの欲望を求める人は、実は苦しみを求めるのである。エーラカよ、もろもろの欲望を求めない人——かれは苦しみを求めないのである。——エーラカ長老——（長老九三）

注 欲望は苦であり、無欲は楽である。

○いかなる常住なる生存も存在しない。また、もろもろの形成されたものも常住ではない。個人存在を構成する五つの要素（五蘊）は、次から次へと生じては滅びる。——ウッタラ長老——（長老一二一）

注 色（物質）、受（感覚）、想（表象作用）、行（意志）、識

（認識作用）で構成されている人間の存在は常住ではない。

○きらめく星の花輪で飾られている夜は、まずわれわれが眠るためにあるのではない。この夜は、はっきりと知る人が目ざめるためにあるのである。——ソーナ、ボーテ、イリヤブッタ長老——（長老一九三）

注 美しい夜は覚者のためにある。

○「これはあまりに寒すぎる」「あまりに暑すぎる」「これはあまりに夕方遅すぎる」とこのように言って、青年が業務を放棄するならば、機会はむなしく過ぎ去ってしまう。——マータンガブッタ長老——（長老二三一）

注 青年よ、日々怠たらず、寸暇を惜しんで努力の生活をせよ。

○この世において人間でありながら、他の生きものを害する人は、この世とかの世との幸せを二つながら失う。

——ヴァーラナ長老——（長老二三七）

注 不殺戒をおかせば、この世でも来世でも幸せは来ない。

○われは死を喜ばず、われは生を喜ばず庸われた人が賃金をもらうのを待つように、わたしは死の時の来るのを待つ。——レーヴァ長老——（長老六五四）

注 生は老、病、死の休みなき進み。賢者は從容として死を

待つ。

○世の中で財産のある人を見るに、かれらは財を得ても、迷妄の故に、与えることをしない。かれらは貪欲であつて、財産を蓄積して、ますます快楽を追求する。——ラッタバーラ長老——(長老七七六)

注 妄執の物持ちは布施の精神がいかけられない。

○ナンダよ、病いにおかされ、不浄にして腐つた身体を見よ。心を專注し、よく安定して身体は不浄であるとの想いを修めよ。——ジェンティニ——(長老尼一九)

注 人間の肉体は不浄であると知れ。

○(バターチャラーニいわく——)その子が来たり、また去つて行つた道をそなたは知らず。またその子がどこから来たかも知らないのに、「わが子!」といつてそなたは泣き悲しむ。——バターチャラーニの弟子である五百人の尼僧——(長老尼一二七)

注 親子の情も無常である。

○全世界は欲望の火が燃え立っている。全世界は焼かれている。全世界は焦がされている。全世界は揺らいでいる。——シースパチャラーニ——(長老尼二〇〇)

附注 全世界の欲望は消えないだろうか。全世界に平和は来な

いだろうか。全世界の宿命か。

○ひとつは四つの尊い真理すなわち苦しみと苦しみの生起と苦しみの終滅とそして八つの実践法よりなる道(八正道)とを識知すべきである。——キサー、ゴータミー尼——(長老尼二一五)

注 四聖諦、八正道の教え。

これらの教えに、世界の人々が、いやわが国の人々が、いや私共の住む地域の人々でも、いや私共の家族だけでも耳を傾けてくれるとしたら、この複雑な社会を生きる人々の心もなごやかになり、そこには極めて楽しい、平和な人生社会ができるものと思うのだが……。

附記 (一)、文中カッコ内の、法は『法句経』、経は『経集』、

長老は『長老偈経』、長老尼は『長老尼偈経』とする。(二)、注は筆者の感想である。(三)、『法句経』は荻原雲来博士、その他は中村元博士の訳によつた。

河西回廊の秋

「五大石窟の旅」旅日記(三)

—蘭州・炳靈寺—



木きの
下した隆りゅう一いち
(隨筆家)

このツアーの朝は早い。六時起床、七時朝食。八時には炳靈寺へ向けて出発である。昨夜遅く着いた時には気付かなかったが、朝になってみると、宿舎の金城賓館は建設途上のホテルであった。しかし従業員は親切で、少しも不便は感じなかった。

初めの予定では、今日九月四日は蘭州市内見物となっていたが、急拠変更して炳靈寺石窟行となっ

たのである。結果的にはこれが幸いした。秋晴れの良い日である。

黄河沿いの甘新公路を車は進んで行く。この甘新公路というのは、蘭州を起点とし、新疆ウイグル自治区のウルムチに至る幹線道路であるが、車で走れば一体幾日かかるのであろうか。地図で見てさえ、気が遠くなるような距離なのである。道幅の広いアスファルトの路の両側は、槐樹の並木が続いている。北京と同じように、ここでも返り咲きした花が見られる。片側には町工場風の工場や資材置場、コンクリート建の団地もあって、洗濯物が翻っている様子は、なんら日本と変わらない。ところどころに映画館があったり、食堂があったりする。食堂の前では、男が立ったりしゃがんだりして、ラーメンのようなものを食べている。多分彼らの朝食であらう。

蘭州市民二百万の食卓を潤して、なお余りある野菜を、近隣の省都などへ出荷しているという広漠たる畑地を抜けて、車は山路へ入って行った。甘新公路をそれたらしく、砂利道を日本製のマイクروبスは力強く登って行く。俄然様相は一変する。左手は水の無い深い谷と、草木のまばらな急峻な山で、ところどころ削られたように地肌が見えているのは滝の跡か。水を吸わない土質と草木の少ないせいで、ちよつと雨が降れば雨水は山を削り、滝となって落下するのであろう。よく見ると、そんな山に山羊が点々と草を食んでいる。そして、ちよつとしたステップを見付けては、ひよいひよいと上へ上へと登って行く。飼われている山羊であらうが、これを追う人間の姿はどこにも無い。もつとも人間が断崖に近いこの山を登れる訳はないが……。見る限りでは人家も無い。山羊はどこへ帰るのであろうか。馬鹿げた話だが、いつになく些細なことが氣にかかる。

峠を越えると、急に視界が開けて、のどかな山村風景が展開する。裕福な村らしく、人家も大きく、広い庭先に、脱穀を終えた黍のような収穫物をうずたかく積み上げている家もある。印象的なのは、幾つも野積された堆肥の山である。新しいのもあれば、古いものもある。古い物は大方土に還って

しまっている。十日に行く天水の麦積山は、麦藁を積み上げた堆肥の山に似ているところから名付けられたと聞いているが、これのことを指しているのであらうか。見たところ、麦藁だけでなく、黍でも高粱でも、植物の茎ならなんでも積んでいるようである。しかし、麦積山を目のあたりにしない限り、断定は出来ない。

蘭州を出て、約二時間で劉家峡ダムにある船着場に着く。炳靈寺へはここから舟行約二時間三十分である。

なにしろ巨大なダムである。高さ百四十七メートル、長さ二百十三メートルの大堰堤に遮られた黄河は、満々と五十七億立方メートルの水を湛えた人工の湖水となった。ダムの地下に設けられた発電所は、つい先頃楊子江に出来た発電所に一位の座を譲ったものの、百二十二万キロワットの発電量を誇っていると言う。発電の他に洪水調節、灌漑、養殖等、多目的にこのダムを機能しているとか。総てが国産というのが、実に素晴らしい。何度も言うようだが、なにしろ大きい。長さ六十五キロ、幅の平均が四・五キロ。面積は百三十七平方キロというから、琵琶湖がすっぽり入って、まだお釣が来るのである。(この項「シルクロード第一巻、長安から河西回廊へ」NHK取材班編・日本放送出版協会出版

— 参照 —

ダムはかなり減水している。曲折したタラップを降りて、ようやく船に乗り込む。栈橋は浮き栈橋の構造を備えているようである。外人数名と中国人の家族等がすでに乗船していて、我々が乗ると船



——椅子に腰を掛けた形の磨崖仏（炳雲寺）——

はあっさり解纜した。佐藤孝雄君の記録によると、十時二十分であった。黄濁した湖面を、三十人程の客を乗せた観光船は軽やかなエンジンで響かせて、ひたすらに黄河の上流を目指す。とは言うものの、流れがまるで体を感じられないので、どうもピンと来ない。湖面は一種独特の色と粘りを持っている。これは削りとられた土壌の差ということもあるが、日本の河川が洪水等でいかに黄濁しても、さらりとした色でこれ程粘り強くはない。出発後三十分程で、洮河の流入点にさしかかると、黄濁度は一層濃くなる。この河の水は黄河の水よりさらに黄濁の度合が強く千トン中三トンの割合で土砂が含まれており、発電所ではダムの寿命を保つため、洮河の水を脇に流しているという。しかし実際にどんな方法でそれを行っているのかは、ついに分らずじまいであったと、前記のNHKのシルクロード取材班は記している。

劉家峡満々秋の水湛へ

この地点を過ぎると、湖水の色は急に変わり、次第に青みを帯びて来るのである。青みを帯びると言っても、所謂群青色のような鮮やかな色

ではなく、風がないせいもあるが、とろりとした緑色があった黄色である。船はやや山側に近い右岸寄りを進んでいる。反対側は殆ど不毛の黄土の台地で、そのはるか彼方の空に入道雲が連らなっている。そして、いつの間にか晴れ渡った空に刷毛で刷いたような雲が現れて、かなりの速さで東へ流れている。なぜか気になる雲の動きである。

炳靈寺に関する文献として私の手許にあるのは、NHK取材班の手記しかなかった。だが、それは私の夢を無残にも砕いてしまった。

「私たちはほぼ垂直に掛けられた木造りの梯子と欄干伝いに、一步一步確認しながら登りつめていった。」（後略）

両膝に痼疾のある私に、これは決定的であった。まあ行けるところまでは行ってみよう。しかし無理だと判れば、あっさり諦めよう——実は今朝宿舎を出る時、そう心に決めていたが、船が奇岩突元とした岩場を縫って岸に近付くまでは、まだ一縷の望みを抱いていた。

「まあ、桂林そっくり！」

甲板のあちこちでそんな歓声がもれる。確かに写真で見た桂林そっくりの光景が目の前にあった。そして、遠くに、岩から半ば乗り出したような磨崖仏が見えた。この仏様の上の方に窟窿が幾つも見え、蟻の這うように見物客が棧道を渡っている。

こりや駄目だ！——私はこの時、窟窿巡りをあっさり放棄した。しかし、せめてあの磨崖仏の近くまでは行ってみよう、でなきゃ来た甲斐がないではないか！

渴水のため、船は岸から遠く離れた仮の船着場に着いた。ここも浮き棧橋らしく、降り立つと、ぐらりと揺れて転びそうになった。

近付くと、磨崖仏は椅子に腰を掛けた形の大仏様であった。上半身は石彫、下半身は泥塑で造られ

ていと言いが、遠目にはその区別はつけ難い。全長二十七メートルと、さすがに大きい。しかし全身痛みがひどく、私には馴染めないお姿であった。従って、私の炳靈寺の評価は低くならざるを得ない。

秋日向鼻の欠けたる磨崖仏

仏像はどんなに破損していても、美しくなければならぬと私は思う。ただ人それぞれ美的感覚が違うから、この大仏様を美しいと見る人がいても、少しもおかしくはない。結局、私は谷を隔てた対岸から、この大仏様をカメラに収めて、炳靈寺訪問を終えた。

一足先に船に帰ると、私は舷側の手摺に凭れて景色ばかり見ていた。すぐそばの岩肌を走るトカゲ。千鳥に似た鳥の群。岸辺の水は割合澄んでいるが、小魚一匹姿を見せない。養殖していると言うが、果してこの人造湖に魚はいるのだろうか。もしいるとすれば、とてつもなく大きい鯉か鯰か、主と呼ばれる魚が湖底の奥深く潜んでいるのではないか——またもや些細なことが、しきりに気になる。空に出ていた薄雲は、いつか鰯雲に代って天候の急変を予告しているようである。

果して、帰途峠で小休止していた時、雷鳴が轟き、ぼつりぼつり雨が落ちて来た。急いで車に乗り込みながら、大陸の雷雨というやつを経験するのも悪くないな、と思ったが、雨はそれまでだった。

雷鳴と稲妻の中を、車は蘭州く降って行く。どうやら雷雨は我々を避けて通つたらしかった。しかし、車が甘新公路に入ると、驚いたことに、たった今大夕立が通過したらしく、側溝から溢れた水が街路を川のように流れていた。黄河の水は荒々しく波立ち、対岸の白塔山は半ば雲に隠れている。

ようやく宿舎にたどり着いた時にあたりはすっかり夜のときばりにつつまれていた。

夕立して坂の蘭州昏れにけり

明日はいよいよ敦煌である。

(続く)

◎『浄土』表紙版画絵販売についての案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、小林治郎先生のご好意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。額縁代も含めて、金二五〇〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えれば幸いです。

また、大きさの方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の小林先生の版画絵のほか、大西耕三先生の雅趣に富んだ版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えれば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

立ち止まるな善導

〈12〉

寺内大告

挿絵・松濤達文

枯れ葉がまねく



善導は長安の都にいる。

すでに二十歳をこえた青年僧であった。浄土思想への関心を深くしたのもこのころからと思われる。實際寺に居住していたはずである。



實際寺は朱雀門のすぐ西隣り、含光門前の太平坊内にあった。善導が此処を長安城内における拠点としたことは、例の龍門石窟にある善導が検校した摩崖仏の碑文にその弟子懷憚を「大唐實際寺主」と詳述している事実からも明らかであろう。つまり懷憚は師の善導を継いで實際寺主となっているのである。

でもこれは後年のことで、若かった善導が

なぜ長安に来ていち早く實際寺に止住するようになったのであろうか。

幼くして出家した山東密州の明勝法師の縁に依ったにちがいない。明勝と實際寺との間に直接の結び付きはないが、同じ金陵（南京）の法朗門で兄弟子だった吉蔵がこの寺に住みつき、遂にここで遷化しているのである。

吉蔵——吉祥大師とも呼ばれた三論宗の大学匠である。金陵の興皇寺や浙江紹興府の吉祥寺、さらには揚州の慧日道場などにいたが、晩年は北上して洛陽、長安に移り住んだ。唐の武徳六年（六二三）の五月、この實際寺東房で遷化した。七十五歳であった。

しかし、吉蔵が世を去ったとき、善導はなお十歳にみたない。面受の機があり得べくもなく叔姪の法縁では止住を許されるほどの強い筋合いとは言い難たい。

前にふれた懷惴の「實際寺主」の内容を検証してみると、この寺は「是ニ於テ僧徒を綱紀シ、釈族ヲ規模ス」とある。つまり實際寺

は僧徒や釈族の修法道場としての性格を持っていたことがわかる。

「統高僧伝」にこんな記載がある。

貞観三年（六二九）唐の太宗は山東密州の明浄法師に詔して、祈雨の修法を命じた。日照りが続いたので「雨乞い」を祈らせたのである。これが効頭を得て報酬として僧三千人に度牒を許したという記載である。

当時すでに官度僧の制は施行されており、官学寺院に在籍する童子や沙門は國家試験受けねばならなかった。これに合格すると「試験度僧」と呼ばれて一人前の沙弥となることが出来た。例外として師僧の推挙や報酬の特典による無試験合格がある。

貞観三年と言えば善導が十六歳である。明浄法師がどういう僧だったか不明ではあるが、その名前や密州の、という点からして明勝法師の法嗣であったか。とすると善導もこの「祈雨の特典」に浴して沙弥となっていたかもしれない。

有資格者となり得たことだけで満足するはずはなく、善導はこの實際寺に身を転じて修法と研学に磨きをかけたのではあるまいか。文諗と少康が共編し道説が補筆したと言われる「瑞応刪伝」が、

——具戒を受けるに及び、妙開律師と共に觀經を見て、非喜交々歎じて乃ち曰く。余行を修して通僻成り難し。唯此觀門、定めて生死を超ゆ、

と書いたのもこの時期、實際寺における善導の若き像を浮き彫りさせたかったからにちがいない。妙開律師がどういう僧であったかは、全く不明である。

ところで實際寺で「觀經」、「觀無量壽經」を初めて披見し、感動したのはきわめて自然である。十年前ここで遷化した吉祥大師吉蔵の遺著に「無量壽經義疏」一卷、「觀無量壽經義疏」一卷があったからである。

この貞觀治の前半、長安城はまだ建設途上にあった。後年の世界最大の都市には、ほど遠かった。皇城や三省六部の政庁建物はいちおう整備されていたものの民家の集結は緩慢だった。隋の煬帝が首都を洛陽へ移した理由にもよるが、長い戦乱で逃散した市民が郡邑から復帰して来ないのである。唐王朝への信頼度が稀薄だったと言える。

しかし長安が世界最大の都市となり得たのは、この創業期に大胆な街路計画を断行したからでもある。皇城、宮殿を中心として大路小路を碁盤の目のように区切って貫通させた。その大路は思い切って幅員を取り、中央には二列の植木が植えられた。槐樹や榆はじきに土地になじんで「一候海棠、三候木蘭」と呼ばれたように新緑が芽を吹いて、街路いっばいに清楚な香りをふりまいた。並木道はその内側を人が歩き、外側は車馬道にあてられた。

車馬道と沿道民家との間には深い溝が掘ら

ネストリウス派である。ユダヤで迫害され、ベルシャ、イラン地方に教団の根をおろしたようである。

長安では景教と呼ばれた。

当初、唐の政庁ではこの景教を仏教の一派と信じこんでいたらしい。「法師」「上座」「尊経」などと仏教用語をそのまま使っていたからである。

皇后文徳はベルシャ人僧たちの勧請を拒げんだが、太宗は大いに興味を示して長安での布教を許し、彼らのために「波斯胡寺」まで建ててやった。

この景教を善導が説いた浄土教、称名念仏に徹した教えと混同する者もいるが、それは翌貞観十年の五月、太宗みずから遠く山西玄中寺に念仏僧の道綽・道宣を訪ねている事実からも判然と否定できる。この点は後でふれる。

二

長安へ出京してきた善導が止住した實際寺。

そこが若い僧徒、釈族が修法研学に励む道場であったことは、前にふれた善導の弟子懷暉の身分記載で明らかであろう。その僧徒釈族も官度僧の有資格者たちである。誰もがふらりとやってきて住みつくというわけにはいかない。いわば此処にいる若き僧たちは唐王制の官吏の一員に組み入れられていたのである。

さらに實際寺がある太平坊には、僧徒以外に若き官吏たちの修練道場も併設されていた。彼らは日中、皇城内の各政庁で働き、朝夕はこの道場で勉強にいそしめねばならない。すでに官吏登用の試験である「科擧」が実施されており、これに合格して採用されたあともつねに「試験」が彼らを待ち受けている。

るのである。政治や法律、経済に関する論文の提出を求められたり、抜き打ち考查に応じなければならぬ。

話は前後するが、この貞観治、長安皇城内にも「寺」がふせられた建物が幾つもある。

「九寺」と称して太常寺、光祿寺、衛尉寺、宗正寺、太僕寺、鴻臚寺、司農寺、太府寺などである。しかし此処で仏事はおこなわれず、純然たる役所なのである。その分掌事項を寺院名順で列挙してみると、郊廟礼楽の管理、宮中宴会時の酒食調達。武器、皇族系図から公用の車馬、厩舎の整備。国賓接待。国有林や田畑の管理、通貨の取締などと万般に及んでいる。

太平坊の北隅、後に王鉉の豪壮な邸宅となつた地域に一本の柿の木があった。秋には見事な実が成って、若者の官吏や僧徒は争つてそれをもぎに集つた。

枝から柿の実も消えて誰も寄りつかなくなつた朝のこと、一人の若い吏生が地面にかが

んでその落葉を拾ひ集めていた。

「そんなものを集めて、どうするのか」
通りかかった善導は声をかけてみた。

「これに文字を書くと、墨がよく乗るんですよ」

未だ少年の面差しが消えやらない吏生は楽しげに微笑んで十数枚に及んだ枯れ葉を示してきた。

「何の文字を書くのかね」

「役所へ提出する政令や詔書に関する意見書です」

「紙に書かないのかね」

「私には紙を買う金がありません。役所からもらう俸給は母に全部、渡さねばならないからです」

屈託なく答えた。

これが善導と吏生王徐明との最初の出会いであつた。

この朝はそのまま別れたが、翌朝また同じ地点にうずくまる若者を見て、どんな文字を

☆☆

落
葉



柿の枯れ葉に書いているのか、善導は確めたくなった。申し出ると王徐明は悦んで善導をおのれの宿房へ案内した。

泥硯に搏墨という墨を炭団のようにねり固めただけのもの、筆も安物の鶏毛筆である。麻紙一枚なく、粗末な小机の左右には枯れ葉が積み上げてあるだけだ。

ただそこにかかれた細字の端麗さは善導の眼を洗った。行間に寸分の狂いもなく、細字の一つ一つは正しい格調を踏まえ、しかも雄渾な筆致で生き生きとしている。

こんな文字で経文が書けたら、と善導は羨望の眼を若い吏生へあてた。だが枯れ葉に浮んだ文章は經典とはおよそ縁遠い。

—— 於是治其幣膚、淨其墮骨、伐俗根老玩之習、以修補腐食、為苟完之計

などと官紀肅綱の檄文が連らなっている。「これを役所に提出するつもりかね」

「明後日が日限ですから」

「果たして上司の人が読んでくれるだろうかね」

善導は、なお二日過ぎて枯れ葉がさらに変色してしまふのを恐れた。

「さあ……見もしないで窓外へ捨ててしまいかもしれませんね」

王徐明はけろりとしている。

「私のところに麻紙がある。持って来てあげよう。明後日までなら浄書も間に合うだろう」

「いや、このままで提出しますよ。それが官紀肅正の良き警告となるはずですからね」

「……」

「役所では、さんざん無駄づかいをして、さらに多大の費用をかけて科挙考試をやって若い吏員を採用しておきながら、彼らが意見書を書く紙の一枚も給付しないんです。これこそまっ先に肅正すべきことではありませんか」

余談になるが、ここで中国における「紙」についてふれておく。

その製出は遠く後漢のころ宦官蔡倫によって発明されていた。二世紀初頭である。その後幾たびかの改良が加えられ、この前唐期には色彩こそ黄味や紫がかってはいいたが、現代に近い紙質のものが多量に生産されていたのである。麻紙とか藤紙とかまた日本へも流入してきた竹紙（唐紙、からかみと呼ばれた）などの多種類があった。

ヨーロッパへの伝播はおそくに中唐期の玄宗治世（七五〇）のころになる。唐軍が現ソ連領のタラス河畔でアラビヤ軍と戦って大敗した。このとき捕虜のなかに幾人かの紙漉き工がいた。彼らはサマルカンドへ送られ、そこで製紙技術をアラビヤ人に教えた。従来のエジプト製パピロスにかわってこの中国紙がアラビアからヨーロッパへと普及していったのである。

それはともかく柿の枯れ葉が機縁となっ

て、善導は王徐明と親交を深めた。何と云ってもその端麗な筆に魅かれた。自分もあのような文字を書きたいと願った。

これは後年の善導が、おびただしい量の写経をした事実とかさね合わせて考えるべきであらう。善導はせっせと「阿弥陀経」を写経しては、長安の街角で道行く人々にこれを配布したのである。受け取った善男善女は経文が読解できないにかかわらず、その端麗な筆致に見惚れてしまったという。善導の説法に耳を傾ける法縁を造っているのである。

ところで王徐明の建白書だが、この柿の枯れ葉が彼の眼前に望外な運命を切りひらいてくれたのである。

当初、予想したとおり、提出された王徐明の意見書はろくすっぽ上司に読まれることなく、尚書省の窓下へ捨て去られた。このまま雨でも降ったら、王徐明は一介の下級吏員で生涯を終えていたことであらう。

庭先を通りかかって何げなくこの枯れ葉を

見たのが御史の蕭翼だった。瞥見して彼は目をむいた。枯れ葉にえがかれた筆の跡にである。これは「ただ者の手になった文字ではない」と枯れ葉を掻き集めて役所のなかへ駆けこんでいった。

すぐに若い少吏王徐明の書と判明し、もっと然るべき麻紙に書くことを命ぜられた。

御史の蕭翼は南朝、梁王家の血を引く名門の出自で、書画にはすこぶる明るかった。こんな逸話がある。

唐の太宗は異常なまでの書道の愛好家で、とりわけ王羲之の作品には目がなかった。王羲之は四世紀に山東の臨沂から出た人で、東晋王に仕えて右軍將軍にまでなった。だが、そんな官歴がかき消えてしまうほど中国書法史にのこした足跡は巨大であった。「古今の冠」とうたわれたほどである。

王羲之の遺作は歴代各国の権力者たちには垂涎的(まこと)で、唐の太宗などは病的なまでにそのコレクションに熱中した。

浙江省の紹興府の寺に有名な王羲之の「蘭亭序」が秘蔵されているという情報が太宗の耳へ入った。そこは王羲之の血を引いた智永禪師の寺であったから、充分に根拠のある情報であった。

まだ皇太子だった太宗は、南朝ゆかりの蕭翼を使者として送りこんだ。

すでに智永禪師は死んでおり、その寺永欣寺は弟の弁才という僧が守っていた。蕭翼はこの弁才に会ったが、これも王羲之「蘭亭序」の価値は充分すぎるほど承知しており、容易に見せてくれそうもない。長安の蘭商人というふれこみで面会したわけだが、最初は世間話や詩談などで相手の気持をはぐした。

二度目に永欣寺を訪ねたとき、やっと王羲之の話題を持ち出した。それも太宗からひそかに借りてきた真蹟を見せながらである。弁才和尚はその真蹟を感服して眺めていたが、これは断片的な小品であった。

「もっと、まとまった作品でないと王羲之の

真価はわからぬ」

と言いだした。蕭翼は胸のうちに舌舐めずりしながら、

「天下にまとまった王羲之なんて実在するのでしょうか」

と持ちかけた。

「ないことはない」

「遠い三百年も昔のこと。石面の碑文ならともかく紙帖の作品なぞが……」

「いやいや、それがあるのだよ」

「あっても贋物でしょう」

「絶対にほんものだ」

「どこにあるのですか」

「うむ……」

しばらく迷っていたが、弁才和尚とうとう立ち上がった。屋根裏へはいりこむと、その梁に手をかけて何やらやってござる。蕭翼がそっと覗くと梁に張った板を剥がしているのだ。梁の内は空洞になっていて、そこに蘭亭の巻物が秘蔵されてあったのである。

「これだな」

ひろげた蘭亭序。蕭翼も目利きは一流の眼を持っている。まぎれもなく真蹟であった。しかし素直に悦んでは手の内を見すかされてしまう。

「私も沢山の王羲之を見てまいりましたが、巧みに似せた贋物ですな」

とケチをつけた。

弁才和尚、顔を真赤に染めて怒りだした。

自分ら兄弟は王羲之の長男から数えて七代目の後裔、あらゆる戦乱や天災地変をくぐって守りとおしてきた先祖さまの逸品だと強調する。

蕭翼は口論をかわしながら言葉巧みに和尚を本堂の方へ誘いだした。王羲之などには、もう興味はない。何か珍しい仏具でも売ってもらいましょう、というわけだ。宿房を去るとき、和尚が王羲之の蘭亭をそのまま机上へ置き放しにしておくのを確認した。

本堂ではあれこれと仏具を取り出させ、裏

めちぎったりケチをつけたりで散らかし放題。和尚が片付けはじめるのを尻目に別れを告げて立ち去ってしまった。その足で宿房へやってきて、留守番をする雑僧に、

「これを忘れては……」

と如何にも自分の所持品だったかのように王羲之の蘭亭を抱えこむと、一目散に永欣寺を逃げ出してしまった。

これが世に名高い「蕭翼賺蘭亭」の珍談である。

三

賺(たん)——だますという意味である。王羲之の蘭亭序をだまし取ったのである。

このあと蕭翼は紹興府の役所から正式の使者を弁才和尚のもとへ送りこんだ。唐王朝の勅令で王羲之を買い上げることになった、という強制通告である。相応の代価は支払われたらしいが、和尚はこのショックで一年もた

たずに死んでしまったということである。

この「蘭亭序」というのは、往昔の風流人たちが流れの美しい川岸に蘭の花を植え、亭を造って集ったのが言葉の発祥と言われる。

酒を汲みながら即興の詩文を紙に書いて川へ流す。「曲水の宴」もその一つである。

そんな蘭亭の宴で王羲之が興に乗って蚕繭紙に鼠鬚筆で序文を書いた。これが幻の名筆「蘭亭序」のいわれである。

唐の太宗はこの「蘭亭序」を石面に刻本して大臣たちに配ったとも伝えられ、その拓本が現存するわけだが、真蹟の蚕繭紙は太宗の死とともに柩へおさめ土中へ埋められてしまった。

ただし、このあと女帝に君臨した則天武后が柩を発掘して王羲之を取り出したという説もある。発掘して世に出たがために行方不明になったとも言われる。

それはともかく書道には鋭い眼識を持つ蕭翼に柿の枯れ葉を発見されたことが一介の

少吏だった王徐明の運命を変えた。若者はたちまち太平坊の道場を去ることになった。

「蕭翼御史のお邸に移り住むことになりました」

と善導のもとへ別れを告げにきた。

「出世したんだね」

「はい、あの柿の葉が太宗皇帝のお目にとまり、詔書の令旨を書く役に取り立てられました」

「あなたの書なら誰にも負けないだろう。私もこうして一枚、秘蔵しているが、手習い書きの手本にしている」

善導は率直に祝福して、黒衣の胸から枯れ葉を取り出して示した。

「ああ、そんな書き損じを……現在の職場には立派な奉書が掃いて捨てるほどあります。新しい紙に、自信のある文字を書いて差し上げますよ」

「いやいや、自信のある文字なぞ容易に書けるものではない。あなたにとってはこの柿の

葉に一枚一枚書いていたときが、最も素晴らしい字が書けたときになるのかもしれない」

善導は深い暗示をこめた忠告をした。その真意がどこまで王徐明に通じたであろうか。

短かった太平坊での交友。善導と王徐明とはじきに含光門の内と外へと別れて、あい逢うことがなかった。

再会は意外なとき、意外な場所で遂げられたのである。

唐の太宗が突如として「北京へゆく」と言いだしたのは貞観十年（六三六）の五月であった。北京とは、山西省の古都、太原である。

太原は、この独裁者が青春の血を燃焼しくした思い出の地だった。彼はあの森中で父の李淵（唐高祖）を煽動し説得し、とてつもなく巨大な「賭」へ踏み切らせのだった。

長安の都から鳳輦の内で旅をつないできたのだが、太原の森が遠望しはじめる汶水の岸へさしかかると、白馬に乗りかえた。老臣の魏徴にも乗馬を命じた。

「やはり北都へ還るときは、これでないとな」
はしゃいだ調子で言った。

馬首を並べた魏徴は黙りこんで返事もしない。彼には太宗のように太原の地への感傷はなかった。

「高祖はな、いくらわしが説いても尻を持ち上げようとはしなかった。仕方なく、わしは晋祠洞の境内へ誘い出したのだ」

今は二十年も昔になった日を思いうかべ、太宗は目をしばたかせている。

隋の煬帝が天下の乱れを意に介しようともせず、群臣の反対を押し切って江南の旅へ出た。この報を聞いた太宗——二十三歳の李世民は、蹶起するは今ぞ、と父を促したのである。太原の古宮である晋祠洞へ連れ出して、この蹶起こそは「正義の戦い」と納得させる。祭神である周成王の弟の唐叔虞の霊前に、天下の民を安んじさせることを誓った。

——唐ヲ以テ天下ノ国名ト為サン

叔虞は智勇兼備の英傑で、この弟を恐れた

成王のために山深いここ山西の地へ封じこまれた。唐王を名乗り、閭々のうちに生涯を閉じた。山西の人々は彼を敬慕して晋祠洞へ神として祀ったのである。

山西、唐の国。この国名を中華の統一国家名とする悲願である。

王世民父子の軍は汾河を南下し、龍門峽を突破して一気に長安へなだれこんだ。長安城の内部からも呼応するものがあつた。その長に立ったのが隋朝の功臣魏徴である。

天下の民を安んずるという大義名分は立つたにせよ、やはり隋の家臣として唐へ寝返った行動にはホロ苦がさしかのこらない。いわんやその「唐王国粹主義」の本拠祠洞へこれから参じようとするのである。

「石壁山の道綽禪師とはどういう人ですか」

魏徴は話題をそらさないではおれなかった。

(つづく)

◎読者の皆様へお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりをはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもあります。誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、宜しくご協力下さいませ。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）
（とめ下さい。）
- 一、枚数 四百字用紙五〜八枚程度
- 一、締切 毎月五日

法然上人鑽仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十一巻 六月号

昭和十年五月二十日

第三種郵便物認可

昭和六十年五月二十五日 印刷

昭和六十年六月一日 発行

編集人 宮林 昭彦

発行人 佐藤 密雄

印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人鑽仰会

電話東京二六二局五九四四番

〒101 振替東京八―八二―一七番

(新)

(刊)

南無阿弥陀仏

『極楽浄土を想い観る』

定価 一二〇〇円

〒二五〇円

浄土教聖典 観無量寿経を読む

著者

大正大学名誉教授・文博

竹 中 信 常

父の殺害を企て母を牢獄に幽閉する非道の王子阿闍世^{アジャセ}。絶望と悲歎の底から救いを求める母韋提希夫人^{イダイマ}。その壮絶な人間ドラマを背景に展開される極楽浄土とは……。悩み、悲しみ、迷う現代人に贈る阿弥陀如来の世界がここにある。

山手書房

〒112 東京都文京区後楽二二二一〇松屋ビル

電話 〇三(八一五)七四八六(代) 振替 東京七―五四〇一八

第五十一巻

六月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
昭和六十年五月二十五日印刷 昭和六十年六月一日発行